The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中井履軒『述龍篇』翻刻
Author(s)	椛島, 雅弘
Citation	懐徳堂研究. 2015, 6, p. 49-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56440
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中井履軒『述龍篇』翻刻

椛島雅弘

一、序言

本稿は、中井履軒『述龍篇』の翻刻である。本書は、既に藤居岳人氏による解説・書誌情報が存在する（湯浅邦弘編集『懐徳堂文庫の研究２００５』所収）。ここでは、藤居氏の解説部分を引用して『述龍篇』の紹介に代えたい。

中井履軒が諸葛亮（しょかつりょう）の兵法について図解を交えて説明した仮名文の書。安永2年（一七七三）の自序がある。履軒自筆手稿本。諸葛亮は三国時代蜀の名臣。彼が若年時に「臥竜」（優秀な人材が時勢を得ずに潜んでいることの喩え）と称せられたところから、諸葛亮の兵法を述べるという意で『述竜篇』と名づけられたものであろう。

『三国志』蜀書、諸葛亮伝によれば、「〔諸葛亮は〕兵法を推演し、八陳の図を作る」とあり、諸葛亮の兵法を表す「八陳の図」なるものがあったことがわかる。しかし、その内容は未詳で、古代より諸説があった。履軒は本書の自序において、諸葛亮の八陣が実は九陣だと説き、諸説が八陣を前提とする点を批判する。そして、諸葛亮の真意が伝わらないのを慨嘆して、その意図を推し量って本書を著したと述べる。

履軒は本文において詳細に「八陳」の兵法を解説する。その兵法における軍隊構成の概略は以下の通りである。まず、一軍は一つの師と四部から成る騎兵とから構成され、帥がその長である。さらに、一師は九個の旅から、一旅は九個の卒から、一卒は九

個の隊から、一隊は九人の兵士から成る。旅、卒、隊の長がそれぞれ伯、正、長である。一旅における九個の卒は五個の戟（げき）（枝のあるほこ）卒、二個の矛卒、一個の弓卒、一個の車卒から構成される。また、天子は全部で十二軍、大国は九軍、中国は五軍というように国の規模によって軍の多寡が決定する。そして、一軍における九個の旅の配置を変えることによって敵に対応するという。履軒は九旅の配置の相違に応じて陣形を方陣、円陣、直陣、横陣、曲陣、鋭陣等のように名づけて、それぞれ図解しながら解説を加える。また、最後部には「蹙陣法」（陣を蹙（ちぢ）むるの法）を付す。これは戦場で死傷者が多く出て上述の「八陣」の兵法が維持できない場合に軍勢を衰弱させないための陣形について説く。本書のあることから、履軒にも兵法に対する関心のあったことが窺える。なお、懐徳堂文庫には抄者未詳の写本[1]を別に収めている。

二、翻刻

凡例

・底本には中井履軒自筆本（大阪大学附属図書館蔵）を用いた。また、判読が困難な文字については、赤松榮による写本（大阪大学附属図書館）と見比べて文字を確定させた。

・漢字は、できるだけ底本のまま表記するよう留意したが、フォントの都合上改めた場所が存在する。

・合字は、表記の都合上仮名に改めた。

・自注部分は、本文より小さいポイント（8ポイント）で翻刻した。また、底本の表記に従って、文字の大きさを変更した箇所が存在する。

・挿入する画像は、紙幅・印刷の関係上、適宜縮小及びモノクロ化している。

述[1]龍篇

自臥龍骨朽也、世之言兵者、莫不搤腕而自言我能為八陣也。其言必曰、八陣之別、六十四陣矣。何物小児慣聞八陣之名。意謂大陣八、則小陣亦八。以八乗八、為六十四陣也。殊不知臥龍八陣。其實九陣矣。即分之、當九九八十一陣也。又曰、四隅為正、四方為奇[2]、夫兵以正合、以奇勝[3]。奇正何常形之有。況臥龍之制陣。八面受敵、迭為頭尾乎。亦何方隅之可指。若夫五人為伍、二伍為什、什伍相乗成軍、是自古之遺法矣。雖然夫臥龍天下之奇才也。以天下之奇才、當天下之大任。脾睨古今、自出機軸。豈

必舐古人糟粕。若章句儒考然哉。世之解説八陣、動輙数千萬言、舉其大綱、不出於什伍六十四陣之外、則其目可知矣。雖復髙妙其説、精密其法、舉属安誕。惜乎、臥龍之制、能傳於後世考、弗過於井畫形勢而已矣。自統轄之方・分合之變、以至器械之制・進退之節、英魂精靈所寓者、咸為烏有。嗟臥龍寃屈於千載、不獨陳壽氏其人也。幽人毎拊髀慨嘆之。属長夏之溽暑、伏枕三旬、乃潛思於斯、審邦俗之宜、辨器械之制、揣臥龍之意、述図一篇、命曰述龍之陣。九人為隊、隊有長。九隊為卒、卒有正。九卒為旅、旅有伯。九旅為師、師有帥。隷以四部騎、軍斯成矣。天子十有二軍、大國九軍、中國五軍、中次三軍、小國一軍、衆寡相統分合相維。井々然條理貫通。意臥龍之制、豈不其然哉。獨異臥龍従昭烈於危難之際、水魚相遭、肝膈相投、特運帷帳之策、而不以汗馬自見也。及受遺輔孤、乃始制八陣、豈以戦陣攻伐非急務哉。蓋汪々之量、自能若斯耳。幽人生于昇平之時、耳不聞鼓鼙之聲。又隱淪乎草莽、無講武之業。乃汲々於戦陣攻伐之説、其不為臥龍之鄙笑者鮮矣。豈臥龍之忠臣云乎哉。

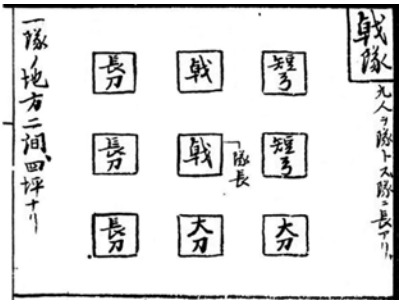
癸己孟秋　履軒幽人自序

〈1〉 述…冒頭の「述」は、元々「祖」と書かれていたが、消されて「述」とされていた。よって、本書は元々「祖龍篇」と名付けられていた可能性が考えられる。

〈2〉 四隅為正、四方為奇…『武編』前集巻四に「諸葛亮之陣、四隅為正四方為奇。」とある。

〈3〉 兵以正合、以奇勝…『孫子』勢篇に「凡戰者、以正合、以奇勝。」とある。

戟隊〔図〕



〔解説一〕

一隊九人、内一人ヲ長トス。外ニ馬一疋鞍手(4)一人アリ、隊長ノ途中並ニ進退ニ乗ナリ。戦闘ニハ用ヒズ。他並ニ此ニ倣フ。

短弓ハ韃弓(5)ナリ。魚須製ニ、凡短弓ハ、左右射ヲ習ベシ。

戟長サ一丈、俗ニ云十文字ナリ。或ハ大身鎗ニテモヨシ。二間柄ノ素鎗(6)ハ用ヒズ。

大刀ハ俗ニ云野大刀ナリ。背ニ負ベシ。佩刀ニアラズ。

大刀ハ長大ヲ貴ブ。大抵柄一尺刃三尺以上、人ニ随テ用捨アリ。

長刀通用ノ制ナリ。重大ヲ貴バズ。

各人佩刀ハ二尺ニ踰ベカラズ。別ニ鮮腕刀ヲ具フ。俗ニ云相口(7)ナリ。長短ハ便ニ随フ。大抵一尺内外ナリ。他並ニ此ニ倣フ。

〈4〉 鞚手…「鞚」は馬のくつわ、もしくは馬そのものを指す。「鞚手」は馬の乗り手の意か。

〈5〉 韃弓…韃靼（モンゴル）が好んで用いた弓を指す。

〈6〉 素鎗…穂先が真っ直ぐ枝のない鎗。もしくは、鞘を外した抜き身の鎗。

〈7〉 相口…鍔のない短刀。

〔解説二〕

戟隊ハ戟ヲ主トス。弓長刀ハ、戟ヲ佐テ敵ヲ勦ス。弓ハ戟ノ敵ヲ射ルヲ職トス。安ニ遠敵並ニ他隊ノ敵ヲ射ルベカラズ。故ニ戟先ツ敵ト合テ、弓長刀ハ、ヤヽ後レテカヽル。戟合ザル以前ハ、射ズ、撃タズ。

二戟ノ内、隊長ヲ本戟トス。前戟ヲ佐戟トス。

大刀ハ、右ヨリ進テ弓ヲ護リ、他ノ敵ヲ拂フヲ職トス。

間アレハ戟ヲ佐テ敵ヲ勦ス、安ニ進ベカラズ。

三長刀ノ内、最後ノ長刀ハ、左ニ在テ他ノ敵ヲ拂ヲ職トス。間アレバ同ク勦ス。安ニ進ベカラズ。

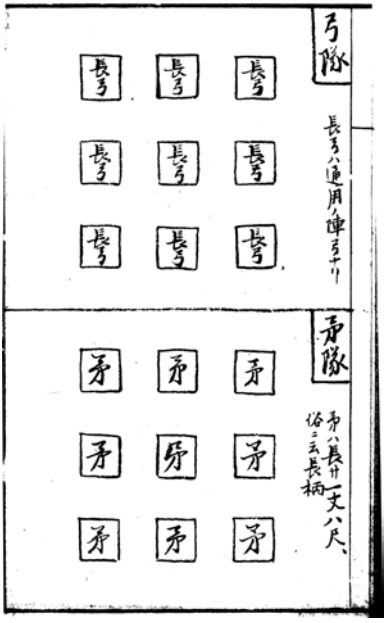
凡隊ハ、一隊一人ノ心持、第一義ナリ。手柄ハ一隊ニテスベシ。一人ニテスベカラズ。

敵一人ニテモ、九人ニテ撃ナリ。首ヲ取ベカラズ。妄ニ引分レテ他ノ隊ノ闘ヲ助クベカラズ。モシ助ルトキハ、一隊九人、一同ニ助ルナリ。

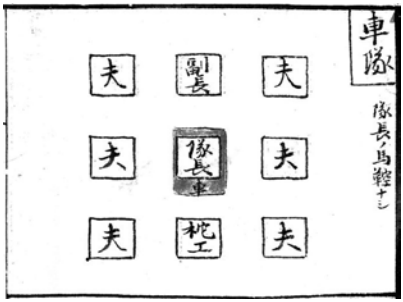
敵隊伍ヲ密ニシテカヽルトキ、或ハ敵ノ大勢ニカケ入トキナドハ、各人闘ヲナシ。相手ヲ擇バザレドモ、大抵コノ主意ヲ失ベカラズ。

隊伍ノ厳ナラザル陣ハ、少シ入乱シテ闘トキハ、皆ワレ〳〵ニナリテ、獨戦ニナル。近世諸名将ノ陣ト云ドモ、皆然リ。コノ陣法ハ、イヅクマデモ一隊ノ人数ワカル、コトナシ。ソノ獨戦ノ敵ヲ、九人ニテ撃ユヘ、必勝ナリ。

弓隊　矛隊〔図〕



車隊〔図〕



〔解説〕

両輪車ニ、大砲二口ヲ載、別ニ鳥銃[8]八口ヲ載、内二口ハ、両長コレヲ操、六口ハ、推夫コレヲ操テ、他ノ敵ヲフセギ、又砲ノ玉ツギノ間ヲクロメルナリ。

両長ハ、車上ニ居テ銃ヲ放ツ。下テ砲ヲ放ツ。

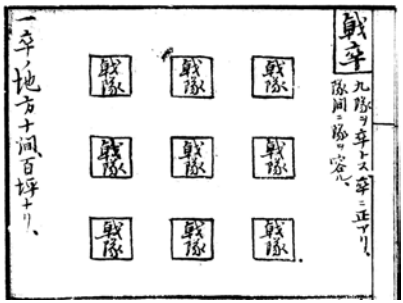
車上ニ板ヲ施テ、上ニ坐ス。砲ハ下ニアリ。

柁工[9]ハ、車後ニ在テ、前却四轉ヲ主ル。推夫ハ左右ニ在。隊長ヨリ推夫マデ、腰刀各一口、長サ尺餘、輕便ヲ務トス。

〈8〉鳥銃…西洋でいう所のマスケット銃。

〈9〉柁工…船工を示す場合もあるが、ここでは大砲等を扱う技術を有した人物を指すか。

戟卒〔図〕



〔解説〕

戦士八十一人、外ニ馬九疋

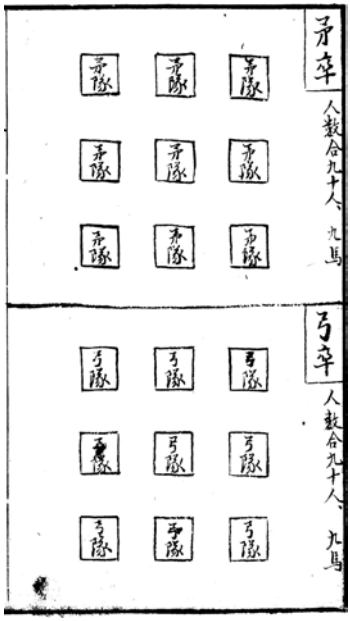
鞄手九人、人数合テ九十人、他並ニ此ニ倣フ。

正ハ一卒ノ将ナリ、中央ニ居。

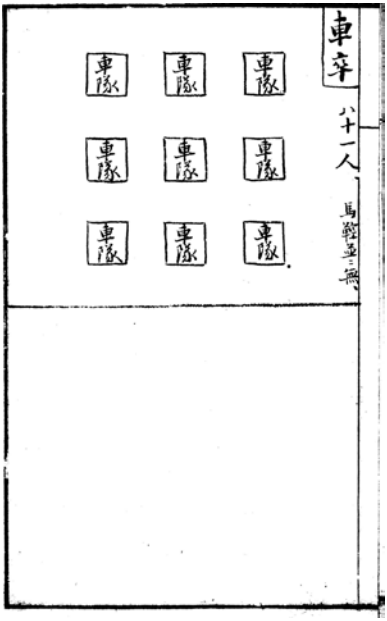
正ハ一卒ヲ一隊ノ如クスル故、中央ノ隊ハ、外ノ隊ト同カラヌコトアルベシ。

隊長ノ馬、並ニ鞄手ハ、隊後ニ置ヘシ。及ヒ炊濯諸事皆隊後ニテ辨スル故、隊後ニハ閑地ナシ。

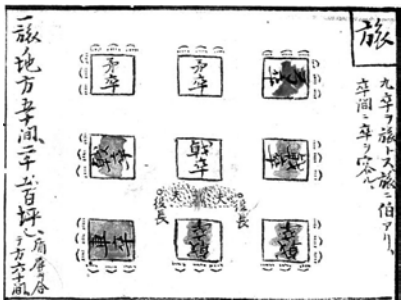
矛卒〔図〕



車卒〔図〕



旅〔図〕



〔解説〕

戦士七百二十九人、盾隊百九十七人、銃隊百九十七人、役夫[10]百人、七十二馬、七十二鞍、人数合テ一千二百九十五人、

戦闘ノ用ハ一千百二十三人、

伯ハ一旅ノ将ナリ、伯ノ陣ニ副貳[11]アリ、行人[12]アリ、私臣私馬アリ。

伯ハ一旅ヲ一隊ノ心ナレバ、中央ノ一卒ハ、外ノ卒ト同カラズ。但人数隊伍ハ、大抵同カルベシ。

屏スルニ盾ヲ以ス。随ニ銃ヲ以ス。

盾屏ハ外ニ出ルコト、方各五間。

盾ヲ四面ニ布ハ、別陳小營ノ時ノコトナリ。

大營ハ下ニ図アリ。

役夫、二部ニ分テ、二長ヲ置。

役夫ハ、斧鋸縄索鐘鎛[13]銅釜汲器ヲ具フ。

役夫、中陣ノ後ニ居ル。敵モシ後ヨリ来レハ、役長各一部ヲ引テ、左右ヨリ中陣ノ前ニ移ル。左右モ此ニ倣フ。

〈10〉役夫…人に使われる者。
〈11〉副貳…長官の下役。
〈12〉行人…使者。
〈13〉鐘鎛…大小のつりがね。

師〔図〕

〔解説〕
戦士六千五百六十一人、盾隊千七百七十三人、銃隊千七百七十三人、役夫九百人、六百四十八馬、六百四十八鞋、輜重五百人、駄馬五百疋、人数合テ一万二千百五十五人、戦闘ノ用ハ一万一百七人、帥伯ノ私馬ハ数ノ外ナリ。帥ハ一軍ノ總大将ナリ。帥ハ一師ヲ一隊ノ心ナレバ、中堅ノ一旅ヲ旗本ト定メテ、副貳以下ノ官属行人醫員ニ至マデ、其数多シ。然ドモ大抵人数ハ同カルベシ。但八方正面ノ意ヲ失ベカラズ。大将旗本ノ備ハ、軍ノ機密ナル故、図ニアラハサズ。輜重ノ進退、役夫ノ如シ。凡隊伍ノ向背ハ、方ニ随ベシ。大營小營ニテ分別アリ。精クハ図セズ。推テ知ベシ。

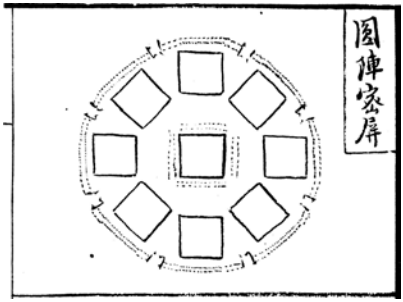
弩盾〔図〕

〔解説〕
五盾ヲ伍トシ、三伍ヲ隊トス。隊ニ長アリ。三隊ヲ偏トス。偏ニ督アリ。四偏ヲ曹トス。曹ニ尉アリ。兵一旅ニ、盾一曹ヲ配ス。一尉四督十二長、百八十盾士、合テ一百九十七人、尉督長並ニ隊数ノ外ナリ。一師ノ盾隊、合テ一千七百七十三人、

盾士各腰刀一口、長サ尺餘、輕去進退ヲ務トス。
盾一伍ニテ、戦士一隊ヲ屏ス。盾一隊ニテ、戦士一卒ヲ屏ス。
一旅別陣小營ノトキハ、盾ヲ四面ニ配ス。故ニ卒間ノ空地ニ屏ナシ。大營ノトキハ、一面或ハ二面ニ併ス。故ニ卒間ノ空地モ屏ス。四方ノ旅、一面ニ立ルトキ、左右各三十五間ツヽ、餘ル。四隅ノ旅ハ、二面ニ立ル故、左右ノ餘リ十間ツヽナリ。コノ四十五間ノ餘盾ヲ以テ、旅間ノ空地五十間ヲ屏スルトキ、五間ノ空地ノコル、コヽニ門ヲ置テ、中堅ノ戦士五十人ツヽヲ配シテ、八門ヲ衛ラシムルナリ。中堅ノ盾ハ、別營小陣ト同ジ。
銃ハ盾ノ後ニ随フ。銃士ノ教法、並ニ盾士ト同シ。
右四面ノ盾、卒間旅間ノ空地トモニ屏ス。然ルニ隊間ノ空地ハ皆アキタリ。盾一位ニテ、廣サニ間ヲ屏ス。伍盾ト伍盾トノ間、又二間ツヽ、アク故ナリ。是ヲ散屏ト號ス。又四隅ノ角モアハズ。モシ盾ノ周密ヲ欲ルトキハ、圓陣ニ變スルナリ。圓陣ハ密屏ナリ。
是ヲ細ニ筭スレハ、盾ヲ密布シテ、隊間卒間空地ナクシテ、一旅ノ左右、十一間[14]ツヽアマル。旅間ノ空地四十九間ヲ、両傍ノ餘盾ニテ、廿二間ヲ屏シ、又門ノ地五間ヲ除テ、二十二間ノコルナリ。然ドモ陣法ニテ、旅間空地ハ方陣ノゴトク、散屏ニスルナリ。故ニ両傍ノ餘盾ニテ、四十四間ヲ屏シ、又五間ヲ門ノ地トスル故、不足ナキナリ。其ノ周密トハ云ガタキヤウナレドモ、旅ノ面ダニ周密ナレバ、是ヲ名付テ密屏トスルナリ。旅間ハ地廣クシテ、全ク無人ノ地ナレバ、密屏ハ実ニイラヌコトナリ。是陣法ナリ。筭法ニ拘ルベカラズ。

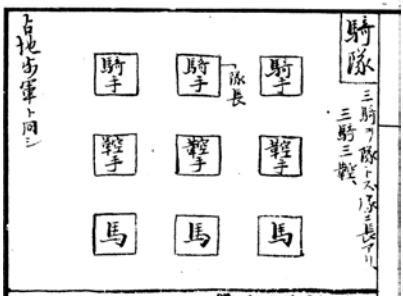
〈14〉間…一間あたり約六尺。

圓陣密屏〔図〕



〔解説〕中堅ハ方陣ノ通リナリ。

騎隊〔図〕



〔解説〕

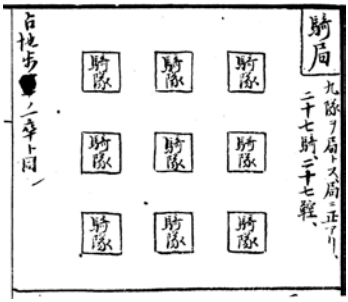
定器ハ短銃、俗云種ヶ島ナリ。

兼器ハ長刀大刀短弓鐵鞭大棒、各ソノ人ノ便習ニ随フ。

鎗戟長弓ヲ禁ス。

騎ノ大刀ハ歩ノ大刀ヨリ短小ニシテ佩刀ニ近シ。雙刀ヲ用ルモヨシ、左右一刀一鞭モヨシ、スベテ一手握ヲ用フ。両手握ハ用ヒズ。

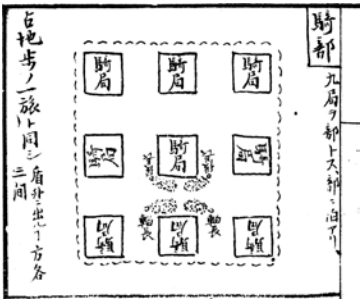
騎局〔図〕



〔解説〕

正ハ一局の將ナリ。

騎部〔図〕



〔解説一〕

二百四十三騎、二百四十三鞍、盾隊三百二十五人、役夫百人、輜重五十人、駄馬五十疋、人数合テ九百六十一人、戦闘ノ用ハ五百六十八人、伯ハ一部ノ将ナリ。

大概歩軍ト比ス。

銃屏ヲ用ヒズ。盾ハ歩陣ヨリ多シ。一尉四督二十長三

百盾士、是ヲ一曹トス。散屏ナリ。騎ハ一部ヲ一營トス。幾部アリテモ、相統率セズ。各直ニ中軍ノ總大将ニ隷ス。騎部ハ大營ノ前後左右ニアリテ、指揮ヲ俟ス。一處ニ屯聚セズ。但闘陣ニハ騎陣ヲ一處ニ張コトアリ、別義ナリ。

〔解説二〕

一師ノ歩ニ四部ノ騎ヲ配シテ、一軍トス。但騎ハ土地ノ險易ニ因テ増減アルヘシ。

天子ハ十二軍〔15〕、大國ハ九軍、中ハ五軍、中ノ次ハ三軍、小國ハ一軍、一軍ヲ小成トス、九軍ヲ大成トス。

一軍ノ闘士、歩騎合テ一万二千三百餘ナリ。一万二千ノ歩騎ニテハ、戦ニ不足ナシ。大敵ニ遇テモ、懼ルコトナカルベシ。九軍ニテハ、十一万一千餘ナリ。十万ノ歩騎ニテハ、天下ニ横行スベシ。

〈15〉天子ハ十二軍…『周礼』夏官司馬では、「王六軍、大國三軍、次國二軍、小國一軍。」とある。

補闕軍

陳營隊部カハルコトナキ故、図ニ及バズ。

各輜重ヲ具ベシ。

人数ノ多少ニヨリテ分合スベシ。又寡ケレバ、歩騎ヲ合ス。衆ケレバ別ツ。

コノ軍、闘ヲ持タズ、故ニ陣營モ本營ノ傍近ニ、便所ヲ擇テ、不戦ノ地ニ居テ、中軍ノ指揮ヲマツ。疑軍ヲ張コト、死傷ヲ扶持傳送スルコト、戦勝ノ跡ニ出テ、敵ノ屍首ヲ割キ、器械ヲ取テ、中軍ニ獻スル等ノコト、コノ軍ノ職ナリ。元来本軍ノ闕ヲ補テ後戦功ヲタツル為ナレバ、ソレマデハ戦闘ノ事ニツカハヌナリ。モシ本軍ノ戦危キトキハ、遊軍トナツテ、横ヲ衝キ、後ヲ襲フコトモアルベシ。是ハ臨時ノ變化ナリ。又カ、ルトキハ、中軍ヨリモ、臨時ノ騈合アルベシ。非常ノ義ナリ。

騈器〔16〕

師帥　鼓五　鐘五　旗五同色（ノボリ）　麾五（サシモノ）〔17〕

旅伯　角二　鉦二〔18〕　旗二同色　麾二

旅伯以上ハ躬ラ麾ヲ背ニサスコトナシ。旗方色ニ随フ。

卒正　螺一　鑼一　旗一　麾一

旗ハ方色ニ卒騈ヲ加フ。

隊長　麾一

モシ隊長死スレバ其隊中ノ一人ソノ麾ヲ取テサス。

巡邏　鐸

盾尉　笛一　麾一　銃尉此ニ同シ

盾督　麾一　號前短弓　銃督此ニ同シ、但號銃ヲ帯ルナリ。號銃ニハ短銃ヲ用。

盾長　麾一

騎部右ニ準ス。但旗ハ紫色ニ各號ヲ加フ。

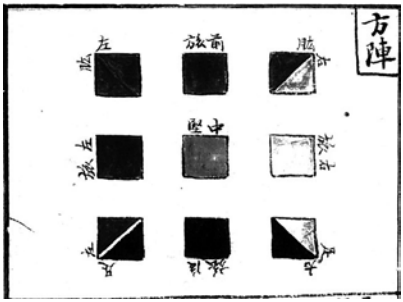
總軍、兜號アリ、袖號アリ、並ニ旗色ニ随テ、各隊號卒ヲ加フ。

〈16〉號…「號」の異体字。

〈17〉麾…軍に合図を伝える旗。

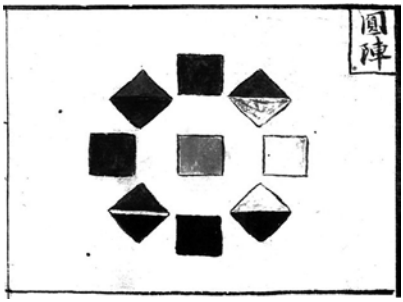
〈18〉鉦…銅でできた平たい円盆形の打楽器。

方陣〔図〕



〔解説〕是大營ノ図ナリ。小營モ此ニ準ス。佗並ニ此ニ倣フ。五色ハ旗ノ色ナリ。旗色ハ定位アリ。前後左右肱足ハ定位ナシ。陣ノ向フ所ヲ前トシテ、左右肱足ヲ逐テ定マルナリ。譬ハ軍行、一日ハ朱旗ヲ前トシ、青黒是ニ継テ循環ス。戦闘モ亦然。旅卒ノ陣ニ至ルマテ、是ニ準ス。下ノ図ニ定位ノ如ニシタルハ、其一端ヲ図シテ、見分ヨキ為ニスルナリ。

圓陣〔図〕



直陣　横陣〔図〕

〔解説〕

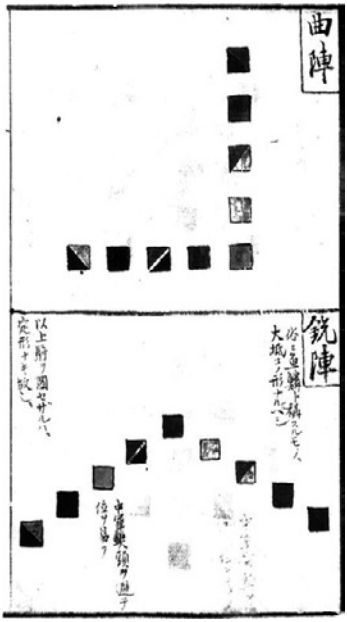
師行ハ左肱ヲ第一トス。次ハ前、次ハ右肱、次ハ右、次ハ中、次ハ左、次ハ左足、次ハ後、右足ニ終ル。旅陣亦然、卒隊モ是ニ準ス。但途ノ廣狭ニ因テ、卒陣ハ一行ニモ、三行ニモ立ルナリ。三行ニ立ルトキ、一隊九人ノ前後ノ次第ハ、右ニ同シ。

一卒ヲ三行ニ立テ、一旅九行ニ並テ行ヲ、平押ト云。

図中ノ小陣、必方陣ニアラズ。方圓縦横、時宜ニ随ベシ。

今ソノ一端ヲ図シテ、見分ヤスカラシムルナリ。他並ニ此ニ倣フ。

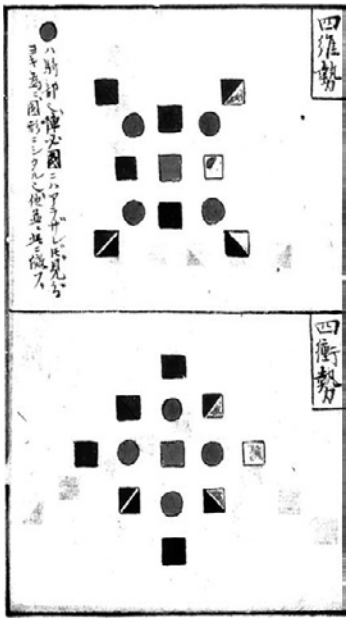
曲陣　鋭陣〔図〕



四維勢

四衡勢

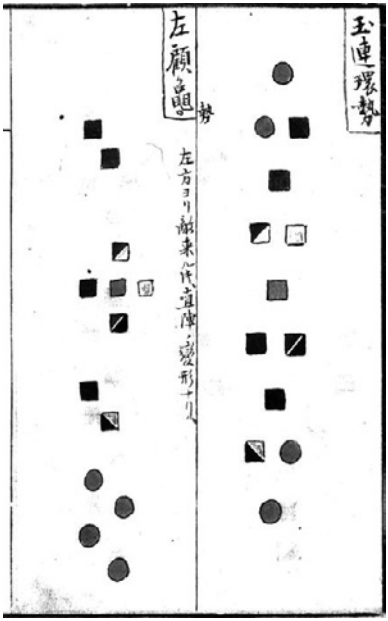
〔図〕



玉連環勢

右顧魚勢

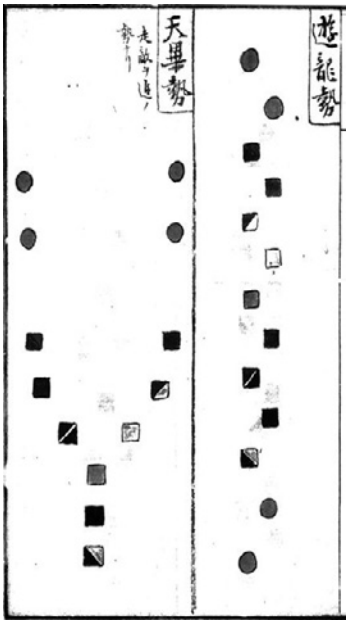
〔図〕



遊龍勢

天畢勢

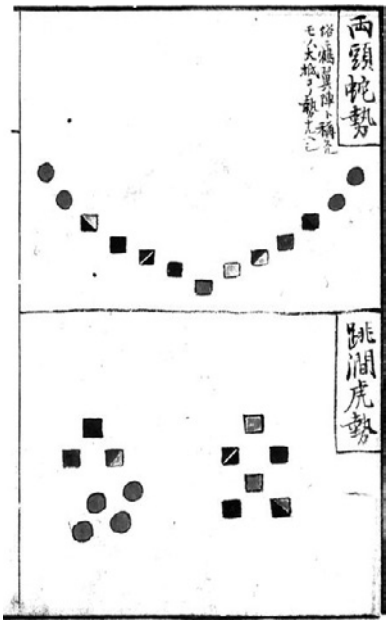
〔図〕



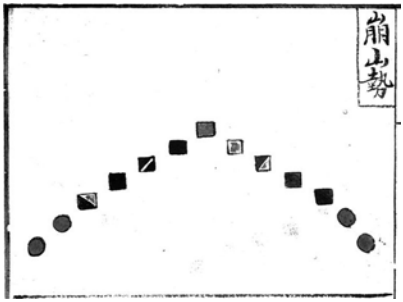
両頭蛇勢

跳澗虎勢

〔図〕



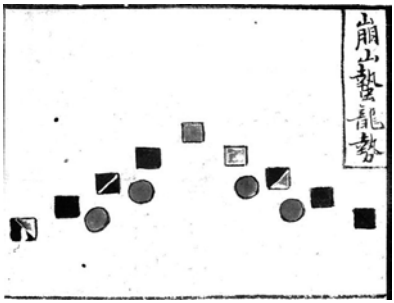
崩山勢〔図〕



〔解説〕
是ハ前ノ鋭陣ト同形ナレドモ、勢カハレリ。鋭陣ハ中堅ヲ退ケテ、堅固ニ持タリ。待テ戦ノ勢ナリ。コノ陳ハ、中堅ヲ尖頭ニ置タリ。即時ニ敵ニ當ル闘陣ナリ。預メコノ陳ヲ張コトナシ。是陳ハ、横陣直陣ノ變ナリ。而頭蛇勢ニ敵スルトキ、我各部ヲ以、敵ノ各部ヲ押ヘテ、中堅ヲ以中堅ヲ撃ナリ。世ニ車懸リ(19)ト稱スルモノ、コノ意アリ。

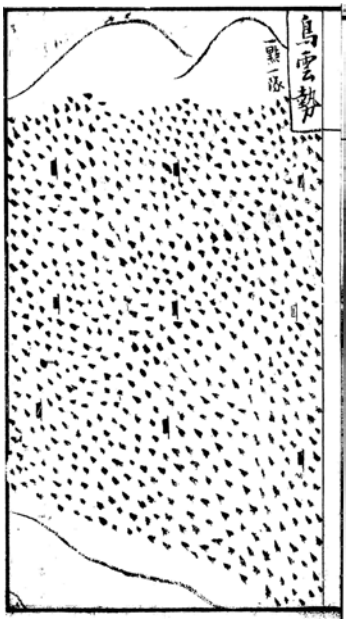
〔19〕車懸リ…上杉謙信が用いたとされる陣法。ただしその実体は諸説あるため、詳細は不明である。

崩山蟄龍勢〔図〕



〔解説〕
是ハ前の崩山ノ變ナリ。又中堅ヲ左右ニ退ルトキハ、待テ戦ノ陣トモナルナリ。前ノ鋭陣ヲ見合スベシ。

鳥雲勢〔図〕

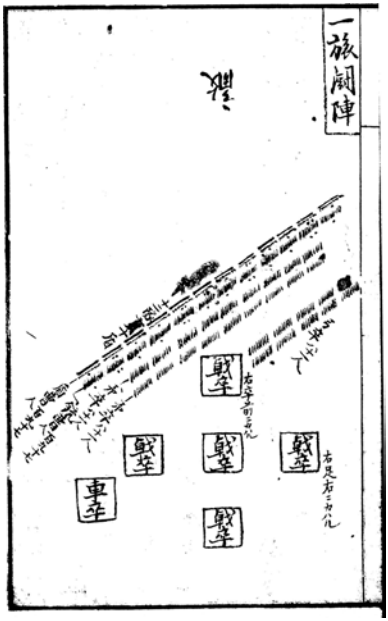


〔解説〕

鳥雲勢ハ、平原曠野ニ用ルヲ主トス。山川地勢ニ随テ、衍蔓布散ス。是ヲ視レバ、漫然トシテ紀ナキガゴトシ。敵ソノ隙ヲ窺フ。触ハズ、撃ベキ形ナシ。旗鼓一タビ動ケバ、方トナリ、圓トナリ、疎密横直、巻舒自在ナリ。山林ニ用ルモ、同シ模様ナレドモ、大衆ヲ用ヒズ。出没變幻、敵ヲ悩スヲ事トスルノミ。遊軍奇軍ノワザナリ。陣勢ノ数ニハ入ガタシ。

凡陣勢ノ図ハ、大綱ヲ擧ルノミ。然ドモ、コレ程ノ事ヲ教練シテ、習熟スレバ、無量ノ變化、コノ中ヨリ出ベシ。

一旅闘陣〔図〕



〔解説〕

是ハ平陳トモ云。敵ヲ待テ闘トキノ平套ナリ。コノ外ハ、繁多ナレバ畧ス。大抵コノ意ヲ以推ベシ。

凡敵イマダ遠ケレバ、闘陣ヲ布ベカラズ。闘陣久ケレバ、気倦テ勢ヌケルナリ。旦形アラハレテ、敵ノ謀ヲ生ジ、敵ニ制セラルルナリ。營陣ヲ闘陣ニ直スコトハ、手間イラズ。須臾ニ變化ス。是コノ述龍陣ノ妙ナリ。兵家者流往々イフ。闘ニ臨テ陣ヲ直セバ、備亂レ譟テ、敗ノ端トナルト。是元来陣法ノ疎ナル故ナリ。

闘法、盾隊盾ヲ列テ坐ス。銃隊ハ盾隊ノ後ニ坐ス。敵近ヅキテ五十間ノ内ニ来レバ、銃隊進テ盾間ヨリ銃頭ヲサシ出シテ、驃銃ヲ聞テ銃ヲ放ツ。敵多ク死シテ、我傷ツカズ、敵益近ヅキテ、三十間ノ内ニ来レバ、銃隊退テ坐ス。盾隊起テ弩ヲ放ツ。敵又死ス。敵猶未テ盾ヲ斫トキ、盾隊一齊ニ矢ヲ放テ、盾ヲ荷テ、左右ニ分レテ、陣後ニ退ク。コノ時銃隊発喊シテ、一齊ニ銃ヲ放テ、亦左右ニ分レテ、陣後ニ退ク。コノ時敵ノ備噪ク處ヲ、矛隊スカサズ突カ、ル。コ、ニ於テ、敵ノ備乱レテ、迭ニ進退ス。コレヨリ戟隊ノ戦トナルナリ。

弓隊ハ敵ノ競来トキ、横ヲ射ニ利多シ。

車隊ハ、不意ニ推出シテ、敵ヲ鏖ス。ヨク用レバ、前ニ堅敵ナシ。機勢アシケレバ、放屁ナリ。将ノ指揮大事ナリ。

盾銃隊、陣後ニ退テ、列ヲナスコト初ノ如シ。或ハ雁行、或ハ鋭頭、一陣戦疲レバ、退テ盾後ニ入テ休息ス。敵追来レバ、又銃弩ノ戦トナル。循環シテ互ニ休息ス。敵去テ、歩隊是ヲ追ヘバ、盾銃徐々トシテ随ヒ行。或ハ地勢ノヨキ處ニ[20]列ヲナシテ、還師ヲマツ。凡去敵ヲ追フハ、騎軍ノ職ナリ。歩軍ハ跡ヲツムルニヨシ。騎軍ノ盾、大抵歩軍ニ同シ。凡敵間遠シテ、矢丸ノ届カザル内ニ、弩銃ヲ放ツコトアシ、。大ニ禁スベシ。

〈20〉 處…「處」の異体字。

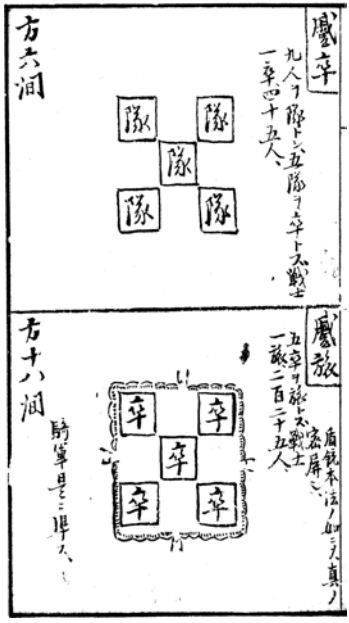
〔附録〕

蹙陣法

〔解説一〕

若戦場ニテ死傷多クシテ、補闕給セザル時、俄ニ備ヲ減ズレバ、軍勢衰弱シテ、我士恐怖シ、敵ノ気盛ニナルモノナリ。カヽル時ニ、軍勢カハラズ、目ニタヽヌ様ニ備ヲ蹙ムルハ、伍法ヲ雑ヘ用ルナリ。

〔図一〕



〔図二〕

〔解説二〕
又隊ヨリ旅マデヲ、本法ノ通ニシテ、五旅ヲ一營ニ立ルコトアリ。是ハ労ニモ、一師ヲ二營ニ分ツトキ、用ルコトナリ。闘陣ニモ、常ニ用ルコトナレバ、此ニ図セズ。

三、研究の視点

ここでは、中井履軒『述龍篇』を研究する上で、検討すべき疑問点を三点ほど提示したい。

(i)「九陣」の由来

『述龍篇』における特徴の一つに、諸葛亮の「八陣」が実は「九陣」だと説くことが挙げられる。この説は、履軒の独創なのだろうか。もしくは、他学者の説を参考にして述べたのだろうか。その手がかりとして挙げられるのが、履軒の師である五井蘭洲著『鶏肋篇』である。『鶏肋篇』兵論中では、「孔明疊石摸營、桓温見之曰、常山蛇勢、即九軍之陣法也。」とあり、桓温が諸葛亮の八陣図を「常山蛇勢」だと述べたが、[3] 蘭洲はこれを「九軍之陣法」だと解釈する。この解釈は、『述龍篇』と密接に関わることが予想され、更なる検討を要するであろう。

(ii)『述龍篇』と江戸兵学

『述龍篇』自序では、諸葛亮の「八陣」の真意を伝えることが著作目的だと表明している。しかしながら、『述龍篇』に見える陣法は、諸葛亮が存命中（三国時代）の時代を想定して著されたものではない。そのことは、「鳥銃」が登場することから明白である。よって『述龍篇』の陣法は、諸葛亮の陣法を履軒の生きた時代に、ある程度適応させて記したものだと言うことができる。

問題は、そのような『述龍篇』の陣法が、江戸期の兵学における陣法とどのような関係にあるのか、である。江戸期では、多くの兵学的著作が作られており、それらと『述龍篇』の関係が今後注目される。

(iii) 中井履軒の学問における兵学の位置づけ

中井履軒の学問といえば、『七経逢原』に代表される経学研究が挙げられる。一方で、『華胥国物語』『越俎弄筆』等、経学以外の幅広い分野でも研究業績を残しており、『述龍篇』もその一つに含まれる。このような状況の中、中井履軒は、兵学を学問上どのように位置づけられたのだろうか。

結語

以上、『述龍篇』を図付きで翻刻し、『述龍篇』から得られる研究の視点を提示した。しかし、今回の考察は、まだまだ初歩的な段階に過ぎない。この点は今後の課題として、稿を改めて言及したい。

注

（1）この写本は、赤松榮によって書写されたものである。最終頁に、「丙子八月十一日一日寫於伏水濠南僑居樓上　赤松榮」と記されている。

（2）『晋書』桓温伝に、「諸葛亮造八陣圖於魚復平沙之上、壘石爲八行、行相去二丈。温見之、謂「此山常山蛇勢也」。文武皆莫能識之。」とある。